

昭和三十五年九月五日 春日部宿

第一〇四回

史跡めぐり(春日部宿との)

越谷市郷土研究会

かすがの歴史余話

山中観音と増田眠牛

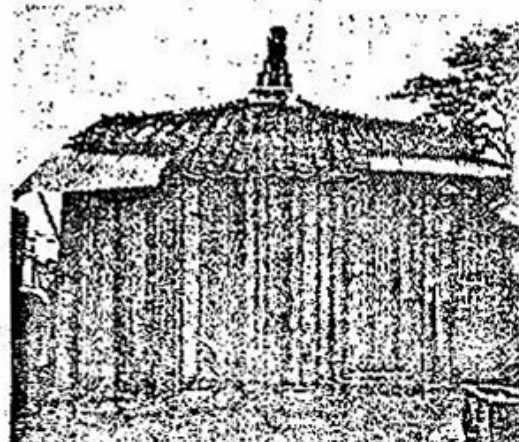
春日部は昔から文化活動の盛んなところで、なかでも俳句は非常に流行していたので数多くの句集が発見されている。

春日部市東口都市改造事務所の隣にあるお堂を山中観音堂という。山中とは、柏壁宿の町裏の字（あざ）名で上山中、下山中と呼ばれていた。現在は観音通りと呼ばれている。江戸時代、この道は内屋（谷）大池方面から神明神社付近を経て、岩槻古道に通じていた里（り）道であった。

山中観音は、江戸時代の俳人増田眠牛（みんぎゅう）の菩提を弔うために醤油醸造業の清水家が建立したもので、お堂の中に眠牛が笈（おい）に納めていた観音画像と杖が安置されている。

江戸時代からの観音信仰は強く、この山中観音にも多くの信者を集めた。しかし、堂が狭いため春日には世話人宅に画像を納めた厨子（ずし）を安置して観音様を唱え、参詣者に食事を提供する行事を行なった。この行事は、大正時代まで続けられていた。

増田眠牛は、宝暦年間（一七五一—一七六三年）の俳人である。眠牛は、千手観音を画いた巻物を納めた笈を背に六部（ろくぶ）姿で風雅の道求めて深谷と柏壁宿にたどりつき、「伊勢平」という米問屋に旅の草鞋（わらじ）の紐を解いた。その後深い信仰と豊かな俳味生活に入り、晩年を柏壁宿で送り、後に清水家に寄寓（ききゆう）した清水家では、宅地の隅に離れ



△ 春日町にある山中観音

家を造り、その観音像を祭って眠牛を住まわせた。これが山中観音堂の始めである。眠牛は明和八年（一七七一年）六十歳で没した。

眠牛の逸話のひとつにつきぎのような話がある。

「伊勢平」が所用のため江戸の旅館に泊っていたある夜、客と囲碁を楽しんでいたが、苦戦となつて「下手だなあ、まずいなあ」を連発したところ、偶然にも隣室に当時江戸で活躍していた俳人「琴太（こうた）」が同好の客と俳談に余念がなく五月雨や 或る夜ひそかに

松の月 琴太
この句を客に示して、その批評を求めていたところであった。そこへ隣室から「下手だなあ、まずいなあ」と言う声、琴太は

てっきり自分の句をなぶられたと思い、我慢がならぬと隣室に飛び込んで「私の句のどこが拙（まず）いか教えてくれ」と詰め寄ってきた。「伊勢平」は驚いて致言は番の差し手に困ったためのものだと陳謝したが、琴太は承知せず「伊勢平」を俳人と誤解し激しく追求した。「伊勢平」は閉口して返答を後日に約して帰宅し、このことを眠牛に話して助力を求めた。眠牛は琴太に会い、その句の非を指摘して「伊勢平」の窮状を教つたという。

かかれぬぞ もういのち毛のか
土筆 眠牛
この句は彼の評世の句である。観音堂の境内に墓塚があり、その側面にこの句が刻まれている（市史編さん室）

今から百八十余年以前、粕壁宿の名主に喜蔵という人がいた(上町)。喜蔵は元文三年(一七三八年)粕壁宿の名主の家に生まれた。父母に孝養をつくし、父母が病床にあるときは枕辺を離れず看護につとめ、業は自分で毒味した後に与える程であった。名主になると何事も公平に行ない差別なく訴えを聞くので、多くの人から父母のように慕われていた。

天明三年七月七日、三万五千余人

の死者をだす浅間山の噴火があった。火山灰は粕壁地方まで降り、田畑を埋めて作物は大被害を受けた。生活に困った百姓達が名主にその窮状を訴え出た。喜蔵はすぐに粥を煮て飢えた人びとに施したり、宿内の地主を説いて雑穀を提供させて急場を救った。

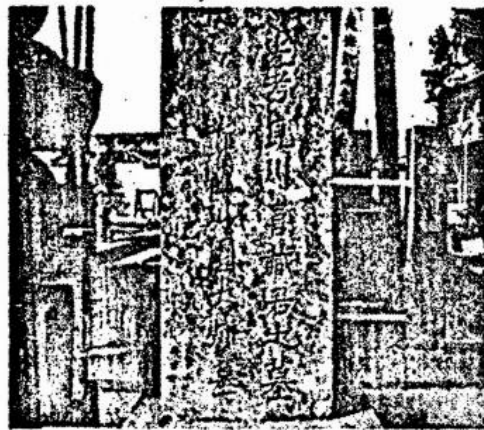
三年過ぎた天明六年丙午に、六月から七月にかけて雨が降り続き関東は大洪水に襲われ飢饉となり、生活に困った人びとは徒党を組んで地主宅や商人宅を襲い、打ちこわしを行ない米麦などを奪い合った。喜蔵はこれらの人びとを鎮め米問屋を説いて廻り、販売する場所を指定して価格を安くして

売らせたりした。また、自家用の米を出し粥を煮て与えたり、地主を説得して米安を供出させたりした。これにより飢饉を免れた者は三百余人に達したという。人びとは喜蔵の恩に感謝して、幕府にこのことを上申した。その後、喜蔵は宿内の耕地を調査して、水害を防ぐために堤防を高くすることを考へ、自費を投じて長さ五百間(約一哩)の堤を築いた。

村役人と協議しこの土地を開墾した。幸手領の文左衛門(幸松地区の人)と相談して、流民を集めてこの地に移住させた。その数六十人と伝えられている。この土地も喜蔵の努力により数年にして立派な耕地になった。幕府は、喜蔵のこれらの善行を賞して銀若干を賜い、終身帯刀、子孫に至るまで苗字(見川氏姓)を名乗ることを許した。さらに頒

新編歴史のかがみ

見川 喜蔵 (上)



△ 成就院にある喜蔵の墓

奉養録に喜蔵の事績と氏名を載せ発表した。文化二年(一八〇五年)十月二十九日、病のため六十七歳で没した。翁の面影等については墓碑の文中につきの如く記されている。翁の顔形はい

かつくて一目見

寛政三年(一七九一年)八月にまた洪水が襲ったが、喜蔵は風雨の中、戸毎に説いて土俵をつくらせ古堤の上に積ませた。昼夜の働きにより下流の田地およそ二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。

て忘れられない印象を与える。また声は大つりがねのように大きく、生米酒をつき合い程度に飲むが、時によつては数斗に至っても乱れることが無く、六十余歳になっても意気盛んで、客にすすめること壮年のような人であった。喜蔵の墓は成就院にある。子息

この他、喜蔵は下野国(栃木県)都賀郡乙女村に未開墾の土地があることを知り、代官および近隣の

次郎吉が建立した墓碑には漢文で五九六文字が綴られている。(市史編さん室)

下だしを付して照会します。
碑文は石塔の三側面に刻まれている。

故柏壁驛亭長喜藏翁墓表
翁諱知舉字喜藏姓見川氏武州埼

玉郡柏壁驛人考諱貞昌妣關根氏世
為孝長翁天性至孝生米色養不怠父

母有病不離其左右丸藥餌必嘗而後
進又善與人交終始一節雖驛卒麻養

亦推誠過之於是
鄉人依歸愛慕敬

之如父母也
天明丙午歲剛

東大浸米價遽漲
窮民餓殍動諭

鄉富察使出貸担
穀而賑助焉

又論儲穀者平
價而賣與之於一

鄉貧民皆免飢饉
之患柏壁之驛湖

古刀細川而川之
西南新方巖規致

鄉收入之定額二万石
秋霖十日水溢巖陵田禾悉沖矣翁

憂之大發鄉丁壯私給資糧而糶凡
數里是後每秋完納而免速運缺之責

者實翁之力也羣衆大喜稱其堤曰喜
藏堤 事達於 官府乃

賜稱氏佩刀列於七流又別賜白金
若干餅加褒賞焉 官刻德行孝義錄

已載其人而詳記其事
先是下毛州乙女壠人戶遷丘田愛

椽非懸令與椽風相謀使翁開墾事結



見川喜藏 (中)



終始節を一にす
驛卒麻養(使用人)
すと雖亦推誠之に
過く、是に於て郷
人依歸愛慕し、之
を敬ふこと父母の
如し。

又善く人と交わり
終始節を一にす
驛卒麻養(使用人)
すと雖亦推誠之に
過く、是に於て郷
人依歸愛慕し、之
を敬ふこと父母の
如し。

父老無不怡而忠者翁娶飯島氏生子
二人男順匡令其長女結婚嫁杉山

氏餘嘗為縣主薄熟翁為人順生餘銘
其墓表弗辭為之銘

銘曰
勳孝千家 施惠千鄉 名教膏露
遠近馳芳 仁愛明賞 子孫承榮

懿哉斯翁 率衆以誠 刀福之堤
功成不崩 民懷遺澤 永世不忘

文化六年歲己巳春三月
越後 澁 磯 環

父老無不怡而忠者翁娶飯島氏生子
二人男順匡令其長女結婚嫁杉山

氏餘嘗為縣主薄熟翁為人順生餘銘
其墓表弗辭為之銘

銘曰
勳孝千家 施惠千鄉 名教膏露
遠近馳芳 仁愛明賞 子孫承榮

懿哉斯翁 率衆以誠 刀福之堤
功成不崩 民懷遺澤 永世不忘

文化六年歲己巳春三月
越後 澁 磯 環

父老無不怡而忠者翁娶飯島氏生子
二人男順匡令其長女結婚嫁杉山

氏餘嘗為縣主薄熟翁為人順生餘銘
其墓表弗辭為之銘

銘曰
勳孝千家 施惠千鄉 名教膏露
遠近馳芳 仁愛明賞 子孫承榮

懿哉斯翁 率衆以誠 刀福之堤
功成不崩 民懷遺澤 永世不忘

文化六年歲己巳春三月
越後 澁 磯 環

碑文の読み下だしはつぎのとおりです。

故柏壁驛の亭長(名主)喜藏翁墓
表翁諱は知舉、字は喜藏、性は見川

氏、武州埼玉郡柏壁驛の人なり。
考(父)諱は貞昌、妣(母)は関

根氏、世々亭長たり。翁天性至孝
にして、生米色養(孝養)怠らず

父母に病有れば其左右離れず、粟
餌を九めて必ず嘗めて後に進む。

又善く人と交わり
終始節を一にす。
驛卒麻養(使用人)
すと雖亦推誠之に
過く、是に於て郷
人依歸愛慕し、之
を敬ふこと父母の
如し。

天明丙午の歲、
関東大浸(洪水)あ
り、米価遽漲(日
々値上り)して窮
民食に難む。翁、
郷の富家に勸諭し

て質を出さしめ、穀を損て、これ
を賑助す。又、儲(貯)穀の者に諭
し平価にして之を一郷に売与え、
貧民皆飢饉の患を免る。

柏壁の驛は古刀細川に瀕み、川
の西南、新方、岩規致郷の收入の
定額は二万石なり。

一つづく

(市史編さん室)

秋霖(秋の長雨)十日、水災に甚れ田禾(稲)悉く沖(水没)す。翁これを憂ひ大いに郷の丁壯を発し私(個人として)に資糧を給して、堤を築くこと凡そ數里、是より後毎秋完納して速に逋欠の責を免るること実に翁の力なり。

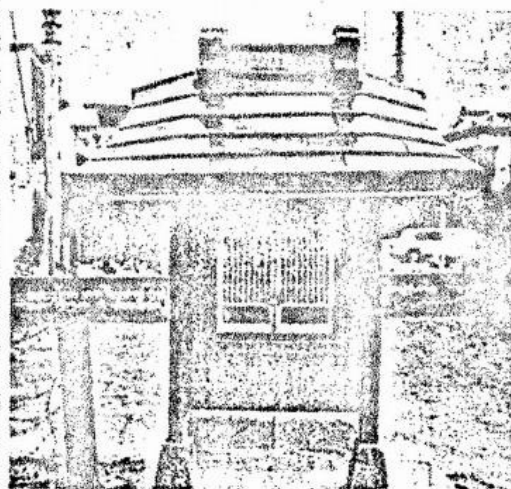
群衆大いに喜びその堤を稱して喜歌堤という。事官府に達し乃ち称氏佩刀を賜ひ土流に列す。又別に白金(銀)若干餅を賜ひ褒賞に加ふ。官、頒行

孝義録を刻し己に其人を載せて詳かに其事を記す。

是より先下毛州乙女郷、人戸逐亡し、田榛莽(やぶ)に委ぬ。令據(代官と下役人)と相謀り、翁をして開墾せしむ。翁起郷の余夫に葬(草やぶ)して田圃を開き、流民を招めて稼穡(農作)に勤め教年ならずして旧に復せり。



見川喜蔵 (下)



△ 神明社わきにある見川稲荷

翁、風貌魁偉、声洪達(大つりがね)の如く、性酒を嗜み飲みて數斗に至るも乱れず。年六十余にして意氣蓬勃として酒を引き、客に勤むること少杜の人の如し。文化二年夏病を得て寝み。其年十月二十九日歿す。享年六十七。駅の愛宕山先塋(先祖の墓)の側に葬る。県令據(代官)及び近郷の父老惜しみて悲しまざる者なし。翁、飯高氏を娶りて子二人を生む。男は日光道中柏壁宿名主安左衛門父差配役 喜蔵 其方義去ル卯年 浅間山焼之節并其後午年大水之節飢渴のもの占食を渡し身元宜ものニも申勸穀物粥等をおたへ且午年之義は累外之飢饉ニ而小前可及騒動体之所早速取鎮メ穀屋共占利解申聞安直段を以爲亮渡多分之飢人を救出水防之

翁、義を重んじ財を輕んじて、窮急(急を救うために恵むこと)救貧惟及ばざるを恐る。是を以て一郷之に服す。郷に争訟の事有れば、則ち翁は其家に就きて懇ろに利害を説き諄々として之を教諭す。而して家の難を排し紛を解けり。是を以て一郷之を重んず。

願匡、亭長として見はる。女は結姫、杉山氏に嫁す。余嘗て縣の主簿為り、翁の為人願生に熟す。余、其墓に銘す、余辭せずして之が銘を為る。

節格別致出精其外於隣村争事出入等之有之節ハ実意ニ取扱和融為致村入用之費用を省乙女村入百姓之義も厚世話致承統可致趣ニ相成以衆々奇特成義ニ付其段申上以所為御褒美白銀拾枚被下之其方一代帯刀御免苗字ハ子孫迄名乗以様可申

銘に曰く 家に孝を勤め 恵を郷に施す 名は青編(歴史書)に載き 遠近芳を誦す。年明實に蒙く 子孫榮を承く 懿しきかなこの翁、衆を率ゆるに誠を以てす。刀橋(利根)

寛政九己年十一月

(市史編さん室)

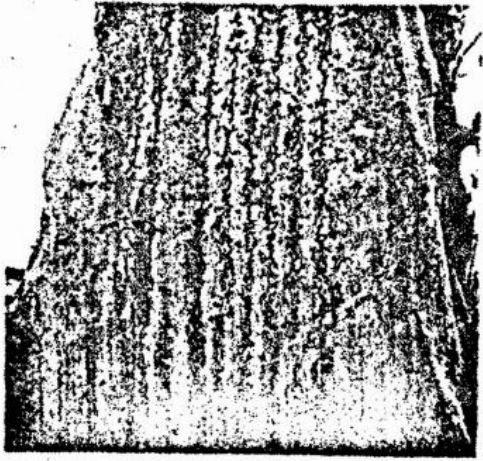
春日部八幡神社表参道入口の左
隅に建立されている碑（高さ3・
37尺 幅1・8尺の石碑）を都鳥
の碑という。

伊勢物語で名高い在原業平朝臣
（第五十一代平城天皇の皇子阿保
親王の第五子で、古今集の歌人）
は、藤原氏の権勢が日毎につのり
ゆくのを憤つて、心は常に穏やか
ならず、平安の都に住むのもいと
わしくなり、東國に住むべき処を
求めて下つて行つ

た。そうして旅枕
をかさねて、武蔵
國と下総國との境
にある隅田川の渡
し場に着いたとき
川の水面に遊ぶく
ちばしと足が赤く
質の白い水鳥の群
れを見て、都では
見たこともない鳥
と思ひ、渡し守に
尋ねた。渡し守は
「みやこ鳥」と答

かすがの歴史余話

都鳥の碑 (上)



△ 八幡社参道入口にある都鳥の碑

河のほとりにむれゐて思ひやれ
ば、限りなくとほくも来にけるか
なとわびあへるに、渡守、「はや
舟に乘れ、日も暮れぬ」といふに
乗りて渡らんとするに、皆人物わ
びしくて、京に思う人なきにしも
あらず。さるおりしも、白き鳥の
嘴と脚と赤き、鴨の大ききなる、
水のうへに遊びつつ魚をくふ。京
には見えぬ鳥なれば、皆人見知ら
ず。渡守に問ひければ、「これな

河であったようである。（川の流
れがまだ一定していない湍流時代
であつたためか）今の川よりも川
幅も広がつたであろうが、その後
たびたびの洪水によつて土砂が堆
積して、流路も変遷し、川幅もせ
ばまったものと考えられる。
春日部八幡神社境内付近は、利
根砂丘の名残りであると伝えられ
ていることから想像できる。
隅田川は、今は流れも細くなつ

て、名も古隅田川
と変わつている。
この川の流域にあ
る新方袋の満蔵寺
門前にある柳若塚
の伝説と同時に、
このあたりが武蔵
國と下総國の境あ
たりであつて、陸
奥への古道の通じ
ていたことがうか
がえる。

えたので、業平は京都のことを思
ひ出して、ひしひしと迫る旅愁と
ともに懐旧の想いに心乱れて
「名にしおは いざ言問はん都
鳥 わが思う人は ありやなしや
と」と歌をよまれた、という。
伊勢物語の九の後段に、つぎの
ように記されている。

「名にしおはば いざ言問はむ
みやこ鳥 わが思う人は ありやな
しやと」とよめりければ、舟こそ
りて泣けり。
業平の物語の時代は平安期であ
り、この時代から室町時代までは
隅田川が武蔵・下総の國境だつた
と伝えられている。

つづく
この業平の故事
を後世に遺そうと
して、江戸末期の嘉永六年五月、
当時の粕壁宿名主であつた関根次
郎兵衛孝熙（安政四年五月二十一
日没 七十五歳）が、千種正三位
源有功に依頼して、その由緒およ
び八幡社の由緒を碑に刻したものが「都鳥の碑」である。

猶行きゆきて、武蔵の國と下つ
総の國との間に、いと大きな河あ
り、それをすみだ河といふ。その

昔の利根川（現在の古利根川）
や隅田川（現在の古隅田川）は大

都島の碑文を讀いた千種源有功は堂上公卿で、正三位千種有象の次男、寛政九年十一月出生、兄有秀の跡をうけて家を継ぎ、左近衛中将正三位に任叙した。和歌にすぐれて四象派の詞をよくし、洒落な人柄であつて奇行が多い人物である。

碑文にはつぎのように刻まれている。

表面

隅田川は、むさしと下つふさの國の界なり、陸奥に往きかよ道にあたる所を、春日部のうまやといふ、在原中持の、いざこととはん 都島とよめりし跡ながら、ふちとかはりて、今は小川となり、むかしのわたりは岡となりしが、元弘の年さが美の國鶴岡の銀杏の一枝飛び来りて、ひとよのほどにおひたりけり、其の神木のもとに、鎮りいます神のみいずの、いやましに幸ひ給へるみやしろのあたりぞ、いざ舟にのれと言けん昔の名残なりけらし

正三位 有功

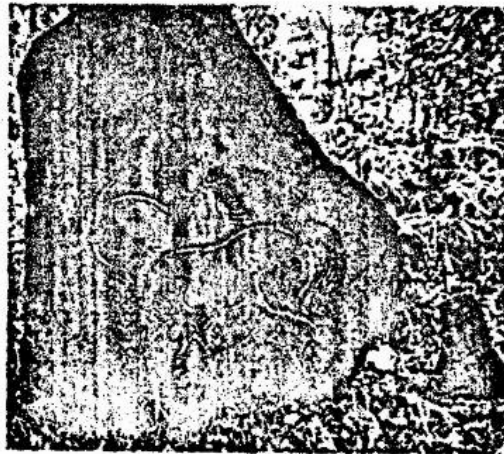
とはれつる あとだにとめよ

都島

むかしは 遠きわたりなりとも神祖にたてる ひと木をためしに

かたがの歴史余話

都島の碑 (下)



△ 八幡社拝殿右側にある自然石の絵馬

て 千々にさかえん 春日部の里
裏面
新方四十余郷惣社春日部八幡宮
は 旧領主 春日部治部少輔時賢
主 隅田川の岡に造立せられたる
所なり。こたび千種殿に乞ひ奉り
て 詠歌を碑面に彫刻す 又放生
会再興の爲に高田貳反五畝三步を
寄附して 永世に伝ふる者なり
嘉永六年五月立

放生祭事いはら住る人々

春日部八幡神社の境内にはこの

「都島の碑」のほかに、拝殿の右側の小高い所に高さ約二尺、幅約一・五尺程の自然石の石絵馬が奉納されている。市内でも珍らしい碑である。碑文もやはり次郎兵衛孝熙の書でありつぎのように刻まれている。
春之日乃野農部

村田源次郎 関根紋左衛門
村田百三郎 大里茂七
内藤甚五右衛門 濱野嘉平次
根岸喜太郎 関田十内

この碑を建立した名主次郎兵衛孝熙は歴史を研究、また書をよくし、粕壁宿近郷にも次郎兵衛の書いた碑文が散見される。次郎兵衛の子八郎孝純もまた歴史、書を好み多くの事蹟を残している。

母里能下草雨不整

駒毛陸志九古曾

安政三年十一月晦七十三翁孝熙

志主 青木三吉

「春日部市史」近世史料編Ⅱ
が発刊されます。

内容は粕壁宿名主の公用日記などです。お申し込みは市史編さん室(電話⑥四四二番)まで。

(市史編さん室)

関根八郎
植村平兵衛
山口萬藏
田村新藏
金子七右衛門
早川与兵衛
増田八郎兵衛
隅田弥次兵衛
青木長内
鈴木權左衛門
村田孫市

早川助三郎
山崎次助
山口長次郎
大里兵蔵
植村久兵衛
植村喜七
斎藤新八
後藤伝六
田嶋五郎兵衛
近藤十兵衛
加藤伊平次

「新編武蔵風土記稿」に「八幡神社、宿の鎮守なり昔元弘中、新田左中將義貞の家臣春日部治部少輔時賢なるもの当所を領し、多年相州鶴岡八幡を敬信し、屢靈譚を聚りしゆへ遙拝の爲、則鶴岡を写してここに勧請すと云

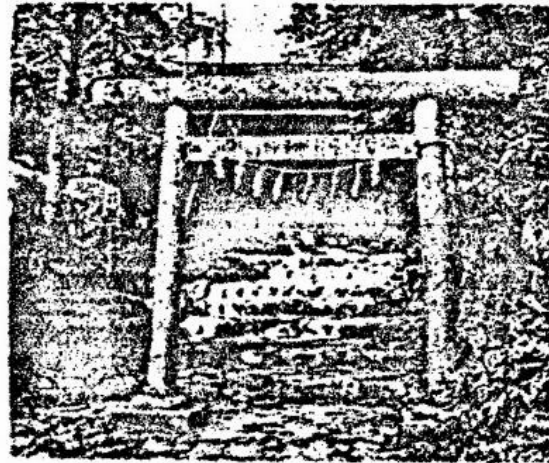
因て昔は新方の惣鎮守にして社字莊殿を尽せしに其後遙の星霜を歴て屢盛衰ありしか、今は社殿備り頗旧觀に復す」と記されている。

所在地は粕壁字
浜川戸五五九七
(宮本町)である
八幡神社の縁起

は右の記述のとおり、元弘年中(一一三三―一一三三四年)に領主春日部氏が相模国鶴岡八幡宮を勧請したものと伝えられている。境内には春日部氏の居城せし館跡も残され、奥殿の脇に當時を偲ばせる土塁等の残痕がある。

かすがの歴史余話

宮本町八幡神社



この神社は、春日部氏の領地である新方領四十余郷(粕壁・豊春・武里・平方・新方・増林・大袋等)の総鎮守であったので、現在も参道の銅製の鳥居には「新方莊総社」の掲額がある。

社前にある御神木の銀杏については、元弘年中に銀杏の枝が飛来して一夜のうちに成長して参詣人を驚かしたという伝説がある。このことについては天保十一年に書かれた「氏子連名帳」に記されている。現在、八幡

神社が所蔵している金泥の鶴の子双紙で出来ているものである。

この神社は明治六年「郷社」に列格され、昭和二十四年、宗教法人法により、「春日部八幡神社」となった。

また、境内には旧本殿が現在の本殿のうしろの高台に安置されている。朱塗りで、柱間一・六材の間社で向拝を付した茅葺、流れ造りの建物は室町時代の流れをくむ桃山時代の建物とすることである(現在、市文化財に指定されている)。

なお、参道入口の左角に「伊勢物語」で有名な業平の詠みし「都鳥」の歌と八幡神社の故事を伝える碑が建てられている。遺者は正三位千種有功である。

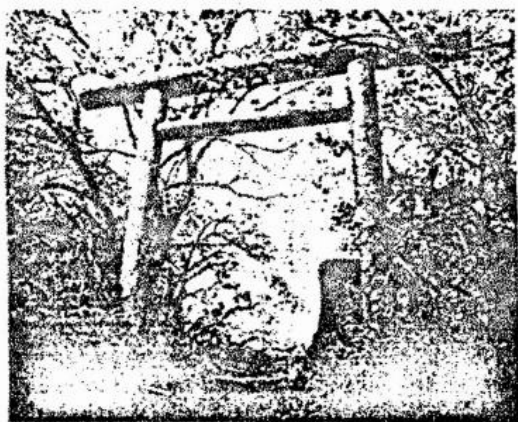
粕壁字浜川戸にある浜川戸稲荷神社の右隣りの小高い山を浅間山という。昔、春日部氏がこの地を領していたころの居城の物見(見張所)として使用されたと伝えられている山である。その後、富士浅間講の信仰の地となり、信者の手によって富士山に形どって一合目・二合目等の標識が建てられ、今もその名残りの標識が発見されている。

「仙元記」(曾川家所蔵文書)によると、弘化二年(一八四五年)六月、この山が風雨により崩れたので、山の形を整えるため粕壁宿はもとより、幸手領・岩槻領・新方領等の近郷から多勢の人達が集まり「ザル」と弁当を持参で崩れた山に砂を選び盛り上げた」と記されている。この場所は古く利根川と隅田川の溢流時代に出来た砂丘(利根砂丘とけう)であるため、砂を運んで盛り上げたものである。このときの砂土運搬に使用された「ザル」が今も春日部八幡神社内に保存されている。

粕壁の歴史

浅間山の登り口に、新教派丸岩講が奉納建立した石の鳥居がある。また、そのかたわらに「ふじせんげんしゃ」と刻まれた二メートル近い石柱が砂の中に半分位埋まったまま横たわっている(関東大震災のときに倒れてそのままになったのか?)。浅間山の信仰の起源は元龜・天正の頃(約四百年位前)皇孫

浅間山



初山に登ることは全ての「けがれ」を払うことであるとされたこれが仙元神社の始まりであると伝えられている。当地の浅間山も毎年七月一日には初山と称して、新生児の健康祈願に登山参拝する習慣がいまも行なわれている。山頂には「不式大神」と刻まれた二財位の碑が建てられている。

この浅間社の起源は不明であるが、江戸時代の天保十四年(一八四四年)に書かれた日光道中宿村大概帳には、最勝院が別当として管理している。また、明治十八年の粕壁宿地誌編輯には祠官松園泰光・祠掌春日部孝純(名主関根八郎)と記されている。

瓊々杵命の妃木花咲耶姫の命を御本体とした駿河国不二山麓の白糸の人穴で、南行導師が行った時、命の霊が現われて「世は將に兵乱の時なり、汝國家を泰平ならしめよ」と告げられた伝説がある。徳川家康は其の地に来て、過去の夢物語りに聞かされた地に神社を建て、木花咲

現在、緑地保存区域に指定されている。

(市史編さん室)



南中曾根と岩槻市大字小溝との境を流れる古隅田川に架けられた石橋を「やじま橋」という。石橋では埼玉県内で一番古い橋とされている。

この場所は旧鎌倉街道筋であり、明治二十一年十月下旬に開通した岩槻新道(旧十六号)のできるまでは、この道が唯一の道路であった。俗に岩槻古道とも呼ばれ、この橋も数年前まで利用されていたが、宅地開発が進みこの橋の際に新しい橋が架けられて、いまは利用されなくなつた。

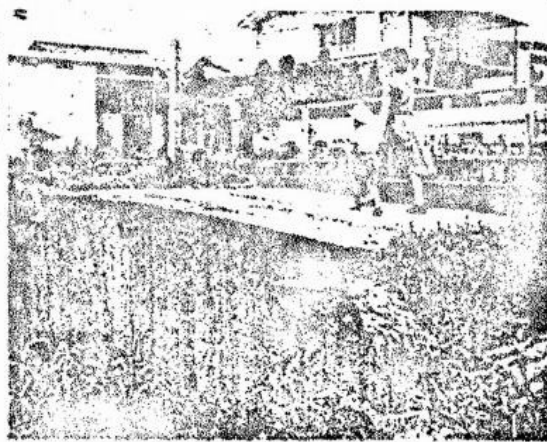
「やじま橋」は、二百四十一年前の元文二年(一七三七年)時の岩槻城主、永井伊賀守直陳の命により道順川戸村の名主、矢島氏(現八嶋氏)が新方庄・上徳田村・徳力村等沿道の者から浄財と労力を集めて架けられたものである。

この位置は太田庄と新方庄の境界にあり、貴重な奥州街道の道筋であった。

橋の構築にあたっては地盤が軟弱のため難工事で、橋脚の沈下を防ぐため水中にある最下部には栗材や松材の丸太を幾重にも井形に



やじま橋



組み、人柱を立てて基盤をつくつた。その上に何百貫という石柱(橋脚)と梁を組み立て、長方形の石(タテ一・八尺、ヨコ〇・四尺、厚さ〇・〇六尺)を十八枚使用し架けられたものである。その中の一枚の石の裏側につきのような文字が刻まれている。

元文二巳歳 永井氏のため志 鶴のハシタテ 亀のカウラン

この文は、永井氏の志により架けられたものであり橋脚を鶴の足にたとえ、橋板を亀の甲羅に見立てて鶴亀となし、幾久しく後世に残れと願って刻まれたものと思われる。

この橋の材料は全部花崗岩である。いつの頃か不明であるが板橋石の一枚がはずれて川中に落下したままになっており、その部分だけがコンクリート板で補修されている。

この街道が利用されていたころは岩槻藩の重要な位置であったので、橋の際には太田庄(後の百間領)の番所や酒場が置かれ、また通行人相手の家があったが、岩槻新道の開通により人家も移転して田圃の中に忘れ去られてしまった。「やじま橋」を渡って通じる道には、いまも辻つじに道しるべや石塔が立っている。

最近、古隅田川土地改良区で河川改修工事の計画がたてられ、この橋の撤去が話題になっている。

謡曲「隅田川」 有名な梅若丸を葬ったと伝えられ、それが、天然記念物の「お薬付銀杏」がある新方袋満蔵寺門前右側の小高いところにある。

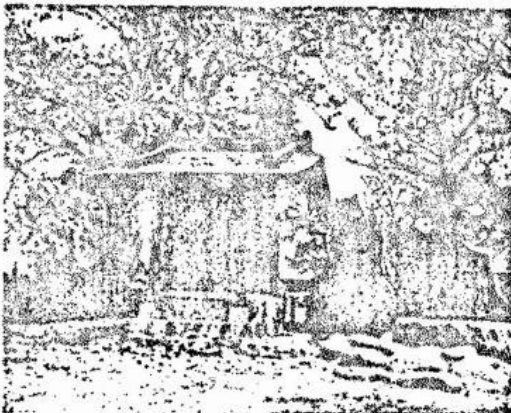
梅若丸は今から一〇一五年前の應和三年、京都北白川に住む吉少将惟房卿と花子の前子で、誕生。七歳のとき、母のため比叡山月林寺の稚児となった。十二歳のとき宗門の争いがあり、その難をさけて下山した

が、このとき人買の信夫の藤太(しのぶのとうた)にだまされて東国へ連れ出され、奥州への旅の途中この地へ来たとき、病となり足手まといとなったので、藤太は梅若丸を隅田川へ投げこんでしまった。幸い岸から川面にのびた柳の枝に首にかけていた「お守り」がからんで助かり梅若丸は岸にはい上がってつかれ伏していたところを村人に発見され、親切に介抱されたが、病は重く村人に身の素性を語り、

尋ね来て問はば答へよ都鳥 隅田川原の露と消えぬと、歌を詠みて息絶えた。時は円融天皇の御代天延元年(九七四)



梅 若 塚



△満蔵寺門前にある梅若塚

三月十五日である。一人は哀れに思いねんごろに葬り、塚に桜を植え供養をした。一方わが子の行方を尋ねてこの地にたどりついた母は、この声にさそわれて塚の前へ来た。この法要に会い、わが子梅若丸の死を知り、供養のため壺をおろして、塚のそばに庵室をつくり梅若の冥福を念じた。枯園和尚(満蔵寺開山祖)は木像を彫って胎内に梅若丸が携えていた母の形

文がある。「梅若社」とは村民式右衛門と云者の宅地内、古隅田川堤の上でありしが、その家断絶して数年の後、享和元年当地へ移せし由、是世に伝ふる梅若塚の古跡にして、隅田村 木母寺にある梅若塚は当所の写なりと、伝ふれど、もとより證となすべき記録もなく……(後略)

梅若塚の話が残されている。いずれが本分かは不明であるが、新方袋の名主山口家に應永三年(一三九六)に作成された「梅若塚略記」という版木が今も保存されている。

見の守り本尊を納め、お堂を建ててこれを安置した。今も満蔵寺山門内の左手にある地藏堂に安置されている。梅若塚については、東京都の史跡指定となっている墨田区の天台宗本母寺があるが、どちらが本末かいまもって不明とされている。「新編武蔵風土記稿」巻之三三七埼玉郡百間領、新方袋村につきの

いる。また毎年四月十五日前後の日曜日には塚の前で宝生流囃託会有志が参集して、謡曲「隅田川」を奉納している。

昭和四十四年、梅若柳桜会が梅若丸供養碑を建立した碑面に梅若のことにみまかり 千年へし今日いしぶみを 建ててしのばん

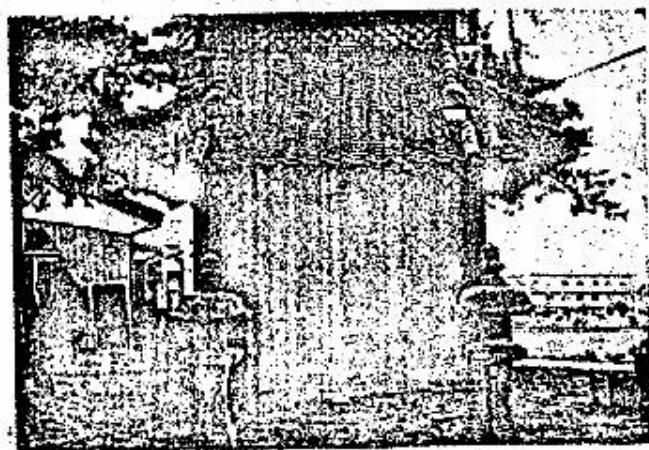
春日部市保健衛生センターの
後方にあり、大きな松の木があ
る神社を三郎谷稲荷という。
社の左側に鉄櫓で囲われた中
に碑がある。この中の大きい碑
の上部に「三郎谷の碑」と記さ
れた高さ一・三五尺、幅一・二尺
自然石の碑がある。この碑は、
谷原新田開発の歴史を後世に伝
えるため、天保四年（一八三三
年）に東谷原の三郎谷稲荷社の
境内に建てられたものである。
谷原新田は、むかし谷原沼と
呼ばれた沼沢地であった。寛文
九年（一六六九年）、東谷原の高
田三郎が西谷原の中村重政とと
もに幕府にこの地の開発のこと
について訴えた。

ので、幕府は老
中稲葉伊予守を
派遣して耕地敷
百町歩の新田開
発を施行した。
開発当初は雑
草がはびこり、
満足な収穫を得
ることができな
かった。しかし
幕府の年貢割付
は厳しく、二人
は村人の窮状を
考へ年貢の納入
について苦慮し
た。西谷原の中



谷原開発と三郎谷稲荷

村重政は、やむなく和泉国日根
郡生垣村熊取（大阪府泉南郡熊
取村大字小垣内）の生家におも
むき、事情を述べて融資を受け
その責を果たしたが、東谷原の
高田三郎は幕府の命にそむきそ
の責が果たせなかったので松前
（所払い）され、東谷原を去った。
しかし、谷原新田開発の功は
偉大なものである。その功も空
しく去った高田三郎に対して、
村人の心には尊敬と愛情の情は
消えず、百六十四年後の天保四
年にこの碑が建てられたのであ
る。なお、高田三郎の遺跡が今
日に至るも語り継がれ、この現
内につきのような遺跡が残され



ている。

一石調 高英神(弘化三年四月)

二高田宮水田移管の碑(昭五・

三・十)

三高田三郎所有地変革の碑

(昭和四十年七月)

前述の「三郎谷の碑」の碑文は漢文で、しかも異体文字、旧字がたくさん使用されたためずらしいものである。

碑文を解説要約すると、つぎのとおりである。

表面

東の方岩築城を距つること一里の所を谷原邑といふ。この昔寛文己酉(九年)東都の人高田三郎・中郎重政、俱に果官(代官)に乞いて以て開拓せし所なり。当村の有司、その地を三分して一は以て牧地となし、二は則ち以て二子に賜ひたり。故に今も東西を以て之を称するなり。三郎は東邑に處り、重政は西邑に處り各々草々の功を以てその邑人を支配せり。人民聚落して今に至るまで其の賜を受くるなり。呂覽(呂氏春秋)という中國の古書物名に曰く「民は賢に従う」と、二子の如きはあに賢

といはざるべけんや。のち三郎故あって東邑を去り、終にその卒する所を知らざるなり。今東邑に三郎谷と称するものはすなわちこれ三郎の旧地なり。この

ごろ東邑の長、平君美その功ありて後無きをあわれみ、西邑の長、藤存義と謀りまさに碑をその地に建てて以てこれを表せんとしすなわち高子(有力者)を介して、はるかに予に文を讀ふ。それ事は世をむなしゆして相感じ或はその人を待ちてしかる後あらわる(その人の功を認めてくれる人があらわれ)。故に身は美しい宝玉をいだけども名はあるいは隠して称せられず、これ史遷の欺ずるところなり、而して今吾この拳に感ずるところあり。

よつてその事を叙して刻む。

天保四癸巳年五月

岩築

岩築親願

精進

次郎兵衛

野口通衛刻

裏面に

碑に所謂平君美とは、その先

祖を獲得といひ、天和元年代官は義将を東邑の長に命ぜしは、けだし三郎がその邑を去りしが故なり。君美に至るまで世世その職(名主)を継ぎしなり。君美は七世の孫なり。易に曰く「積善の家には必ず餘慶あり」と、義将の行う事は概ね見るべし。

碑成りし後、また邑人のもとめに応じて君美の爲に記すこと斯くの如し。

下段に当時の名主・村役の人の氏名が刻まれている。

谷原新田の開発は農業史に大きな足跡を残した。その中で高田三郎の遺徳を偲び三郎谷の地名が今も残されている理由がうなずける。



昭和三十五年九月廿一日郷土資料

第一〇四回

史跡めぐり(春日部宿)その二

越谷市郷土研究会



春日部市



現況

〔成立〕昭和29年(1954)7月1日、南埼玉郡春日部町・豊春村・武里窪村、北葛飾郡幸松村・豊野村の1町4村が合併して成立〔面積〕37.96km²〔人口〕5万292人〔地形図〕大宮・野田・水海道〔市の花〕フジ〔市の木〕キリ〔市役所〕〒344 埼玉県春日部市大字柏壁24880番地〔市名の由来〕中世以来の郷村名による。

立地

西部の台地と東部の低地 県東部に位置し、都心から35km圏。東は北葛飾郡庄和町・松伏町、南は越谷市、西は岩槻市、北は南埼玉郡白岡市・宮代町・北葛飾郡杉戸町に接する。本市域は中央部に大落古利根川、東に庄内古川、西に元荒川が北西から東南に流れ、これら諸河川の自然堤防上に集落が発達し、概して西部の台地と東部の低地から成る。台地は内牧台と花積台地区で、内牧の台地は西の中原新田で海拔14m、東へ低くなり、低地へ続く。花積の台地は慈恩寺支台の東端で海拔18m、北西に向かって低くなる。両台地とも河川の開折により小谷をつくり、出入の多い地形となっている。市域の大部分を占める低地は大落古利根川・古岡田は古川により形成され、海拔8～5mの微高地形を示し、小淵や八木崎

には海拔20m近い河畔砂丘が見られる。

近世以降、日光街道の宿場町、埼玉穀倉地帯の行政・商業・交通の中心地、特に大落古利根川の舟運を利した米穀商や肥料商の多い町として知られる。昭和41年以降、武里団地の造成と地下鉄日比谷線の乗り入れによって急速に都市化が進行し、田園住宅都市に変貌してきた。

沿革

〔原始〕花積貝塚 市域の遺跡は西部の花積・内牧の台地に集中している。「泉道跡地名表」(昭50)によると、市域の遺跡は縄文期～平安前期にかけて39か所あるとされ、このうち縄文期の集落跡・貝塚が21か所、縄文期～平安期の集落跡が2か所、古墳15基、時代不詳の塚1基がある。代表的な遺跡は花積貝塚(花積)と内牧古墳群(内牧字塚内)で、ともに県指定文化財となっている。

花積貝塚は花積の元荒川左岸の洪積台地先端部にあり、沖積低地との比高差7～8m、多数の小開折谷が入り組んだ台地縁辺の平坦部から斜面にかけて形成され、昭和3年に大山史前学研究所、昭和43年に市教委と泉道跡調査会によって発掘された。大山史前学研究所の調査によって「花積下層式土器」が提唱され、第2次大戦後の土器細分論と絡んで土器型式の標準遺跡として著名である。昭和43年の調査では花積下層期(縄文前期)の貝層を伴う住居址、加曾利E1期(同中期)の貝層を伴う住居址を発掘、多くの石器・土器とともに中期の貝層からバンドールカ・ウミガメの骨や甲羅を出土したほか、浅い土壌から仰臥屈葬状態の成人男子の埋葬人骨も発見され注目を集めた(花積貝塚発掘調査報告書)。

内牧古墳群と塚内4号墳 内牧古墳群は慈恩寺支台中の1支台である内牧の台地上に立地し、海拔10～15m、墳頂部と水田面の比高は約8mである。古墳群の分布範囲は東西約700m・南北約600m、ここに現在13基の古墳があり、南埼玉地域最大の古墳群となっている。墳丘は10～20mの円墳がほとんどで、内部主体は角閃石安山岩を用いた横穴式石室が9基、石室があったもの1基、不明3基といわれ、直刀・須恵器・埴輪片の出土をみ、7世紀の築造とされている。昭和52年8～9月に市史編纂室により塚内4号墳が発掘調査され、粘土器3基と木炭椀1基を発見、直刀・鉄鎌・ガラス玉などを出土した。周溝から人物埴輪・円筒埴輪の断片や土師器・須恵器も発掘され、築造期は6世紀前半と推定されており、今後よりいっそうの検討が望まれる。

〔古代・中世〕業平橋と梅若塚 市域で奈良・平安期にかかる遺跡は花積の内谷耕地と反町耕地に存在するといわれるが、発掘調査を行っていないので詳細は不明である。ただし、花積貝塚と内牧古墳が付近にあるので、その地域に古代集落が営まれていたことは予想される。律令制下、市域は古岡田川を境に武蔵・下総両国にまたがり、郡は武蔵国埼玉郡・下総国葛飾郡に属し、関連する郷は葛飾郡八島郷・埼玉郡余戸郷とされる。平安期には八条院領の太田荘・下河辺荘に属した。古くから名代の春日部が置かれ、それが地名となったと伝える。「岩尾系

國」によると、平忠常の乱の長元元年(1028)9月21日、東國兵を率いた源頼義が平忠常の弟の忠頼、子の忠将の軍と河越段で戦い、忠頼は敗れて岩付に、忠将は中野に陣した。25日に頼義軍は岩付を攻め、頼義軍は中野を攻め忠将軍を撃破したとある。この系図は史実や史料批判の面から問題があり首肯しがたいが、市域にかかる数少ない古代伝承として掲げておく。なお、これと同様に上埴田¹⁰の古蹟田川に在原業平の東下り伝説に関わる業平橋、新方袋¹¹の真言宗清蔵院に梅若伝説にちなむ梅若塚があり、古代における市域の様子をうかがわせる。

春日部氏の活躍 春日部氏は平安末期に武蔵国荏原郡に住した本姓紀氏の武士団の一派が春日部に移り住み、在名を名乗って春日部氏と称したといわれる(尊卑分脈)。同氏の活躍は大半は「吾妻鏡」に載せられているが、「竜燈山伝燈記」に寿永2年(1183)高野の永福寺の檀那に春日部右兵衛尉実光・子息甲斐守実景の名が見えるのが初見である。文治元年(1185)壇の浦の戦いに春日部右兵衛尉が従い、元久2年(1205)正月、北条時政が將軍実朝に馬と剣を献上した時、二郎実平が馬引きの役を勤めた。宝治元年(1247)の三浦の乱に際し、甲斐前司実孫は三浦方にくみして子息広実・実秀・三郎兵衛尉ともども討死にした。乱後の幕府の追及は厳しく、実景の赤子まで春日部で捕えられ鎌倉に連れ去られた。この後春日部氏の受難の時代が続き、弘長3年(1263)三郎実実が美濃国指(掛)深荘の地頭職を没収された。嘉元2年(1304)の六波羅探題下知状(欠文)には伊勢国の所領紛争の札明使として弥二郎入道の名が見える(金沢文庫古文書)。実景の孫重行は元弘3年(1333)新田義貞の鎌倉攻めに従い軍功を挙げ、滝口左衛門入道となった。建武2年(1335)足利尊氏が建武政権に反抗した時は南朝に従って奮戦し、翌3年3月22日「上総国山辺南郡、下総国下河辺庄内春日部郷頭領職」(武文)を安堵された。同年6月重行は三条河原の戦いで敗れ篤森で討死にし、8月重行の跡職は若法師以下に与えられた(武文)。一族時賢は建武3年尊氏が九州から西上した時、新田義貞・名和長年らとともに後醍醐天皇を擁し叡山坂本に奮戦したが討死にし、その後天皇が尊氏の請により京に還幸した時、家範が供奉している(太平記)。浜川戸の八幡社は時賢がその地に八幡宮を勧請したと伝え、またそこに春日部氏の館跡がある。

鎌倉街道 中世を通じて主要な交通路となっていた鎌倉街道は、市域には2路線ある。1つは春日部氏が鎌倉への往来に利用したといい、浜川戸の八幡神社から春日部高枚の塚際を通り、新方袋から中曽根の矢島橋に通じていた。もう1つは奥州への道として、岩根の慈恩寺から花畑・道口窪田¹²・矢島橋・新方袋(ここで春日部館跡への道と分岐)、塚内・谷向・戸崎を経て百間¹³の西光院前へ出、高野で利根川を渡り奥州へ通じていた。前者も奥州路へは通じており、八幡神社から浜川戸薬師前・梅田の雷電社・内牧の七曲り道を経て戸崎で合流している。

小淵の不動院 不動院は本山派関東修験年行事職大先達で、祭下では入間¹⁴・秩父¹⁵の両郡を除く各郡53か所(新編武蔵)に配下を有し、さらに南武蔵や上州

はもとより、関八州に対して小田原の玉滝坊と支配を分け合うという強大な勢力を有した修験であった。京都聖護院末、役流山¹⁶といひ、本尊不動は役行者の作と称される。開山は法印秀円、三河吉良荘齋藤村出身の齋藤氏の出で(齋藤家系譜)、能登守浄春が文治年中(1501~04)三河国より関東へ下向し、その子秀春が天文11年(1542)源忠忠の命により修験となり、名を秀円と改め不動院の開山となったと伝える。同13年没し(新編武蔵)、2代頼長の時に一色氏の外縁を受けて急速に勢力を拡大した。天正8年(1580)北条氏政から東上州の年行事職を安堵され、天正19年に聖護院門跡から御教書を、翌20年に徳川家康から修験年中行事職を安堵されており(不動院文書)、頼長の代に小田原の玉滝坊と並ぶ勢力を有していた。このように急激に勢力を拡大した理由は、幸手¹⁷の領主一色氏の後援を得、一色修理亮頼直の娘を頼長の妻としたことや、徳川氏との関係によるのもであろう。慶安2年(1649)家光より100石の朱印地を与えられ、5世頼米は水戸光圀の養女「おみき」を妻としている。貞享5年(1688)には隣接の浄春院と百余尊像現・賢明神の掃馬をめぐる争い、幕府より裁許状を得ている(浄春院文書)。

多田新十郎と関根園書助 永禄11年(1568)秋以降、相模の北条氏政と甲斐の武田信玄は対立を深め、しばしば駿州興津河原や薩埵山辺で戦った。翌12年3月13日夜、信玄勢が薩埵山に夜討ちをかけた時、小田原北条方に属していた柏壁の多田新十郎は、武田方の針字文六を討ち、氏政にその戦功を賞された(多田文書)。多田家は多田満仲の後裔と伝え、美濃国土岐の家臣であったのがち武田信玄に仕え、新八郎正吉の時辞して岩付太田氏の家臣となったという(同家系図)。新十郎の子孫はのち関根氏を名乗り、宿内の旧家として栄えた(新編武蔵)。永禄末から元龜・天正初年にかけては甲・相・越3國の関係がめまぐるしく変転し、それに応じて武蔵國境でも激しい事態の展開が見られた。関根惣では築田氏が上杉勢と結んで小田原北条氏と鋭く対決した。こうした状況下で岩付城は関宿や古河に対する最前線基地となり、玉縄城主北条氏繁が在城して関宿と対峙した。天正元年の関宿との前哨戦は構壁辺で行われ、この戦いに関根園書助は「今度從関宿勤仕備け返逐整合討取事」により氏繁から感状を得ている(関根文書)。関宿攻略はこの後本格的に行われるが、園書助の活躍については史料がなく明らかでない。小田原北条氏治下の構壁は御領所として重要な役割を占め、豊臣秀吉による小田原攻めの前年である天正17年(1589)3月には、岩付城防衛の臨戦体制下で大普請と棟別銭の賦課をうけ、諸役免除は前々の通りとし、代わって閉壘を命じた氏房の印判状を得ている。翌18年5月の岩付落城は柏壁に大きな打撃を与え、農民は戦禍を避けて柏壁を退去していった。このため徳川氏の入国により城主となった高力清長は、寛年(天正18年か)宿民の相住を命じ先判に任せ構壁新宿を取り立てよう関根園書らに命じている(関根文書)。

〔近世〕 柏壁宿 柏壁が日光街道の宿駅とされたのは元和2年(1616)とされている。当初常備人馬は25人・25疋であったが、享保以後35人・35疋

と改められ、このうち5人・5疋は器人馬である。元禄9年(1696)に地子免1万坪をうけ(公用鑑では元禄10年)、宿民の伝馬役負担は間口割で102株の伝馬株があった。継立では越ヶ谷・関宿・杉戸・岩槻などの各宿駅で問屋場は宝永元年(1704)以後定問屋場が上宿に設けられ、問屋役は問屋2人、年寄4人、横付2人、馬指4人の構成であった(宿村大綱帳)。文政年間(1819)の宿の状況は民家880軒余、多くは街道沿いに軒を並べ、宿駅と諸商で生活を維持し、市は4・9の日に立てられた(新編武蔵)。文政12年(1829)の生業書上では、農業一統渡世205軒、農間高職職677軒、この中に居酒屋渡世25・大小形研屋1、湯屋渡世7、物売買渡世9、質屋渡世18、飯売茶渡世33があり(宿公用日記)。「諸商人多し」(宿村大綱帳)を裏づけている。このほか宿内では男はわら細工、女は木綿織りを生業としていた。天保14年(1843)の戸数は773軒、人別3,701人、本陣は上宿に1軒、脇本陣は中宿に1軒、旅館屋は45軒、宿高は1,696石余であった(宿村大綱帳)。本陣役ははじめ関根家、宝暦末年見川家が継ぎ、文化6年(1809)には小沢家と交替したが、天保4・天保6・弘化4年と相次ぐ火災と、この間天保14年(1843)の日光社参で経済的打撃を深め、嘉永2年(1849)脇本陣半三と交替している(宿公用日記)。助郷高は1万3,442石、29か村であった。

江戸期の村々 江戸期における市域の宿村は正保期に28か村、幕末には35か村に分かれていた。領主は正保年間に岩槻藩阿部氏領が内牧村など10か村、幕府領が備後村など15か村、幕府領と寺領の相給地が3か村(田園簿)、幕末には岩槻藩大岡氏領が7か村、幕府領が23か村、幕府領と藩領・旗本領・寺領の相給地が5か村(旧高旧領)となっている。幕末期の村々は柏壁宿(880軒)を中心に新方領・百間領・幸手領・松伏領・岩槻領にまたがり、内牧村(225)・吉郎兵衛新田・梅田村(65)・上蛭田村(35)・下蛭田村(23)・道順川戸新田村(5)・花枝村(14)・蓮口蛭田新田村(10)・増戸村(34)・増富村(44)・中曾根村(54)・下大増新田村(44)・上大増新田(44)・東谷原新田・西谷原新田(31)・新方袋村(40)・備後村(140)・一ノ割村(85)・大堀村・大枝村(59)・大畑村(52)・中野村(40)・薄谷村(30)・増田新田・八丁目村(120)・小淵村(114)・不動院野村(102)・榎野村(50)・新川村(30)・牛島村(62)・榎村(16)・藤塚村(146)・銚子口村(92)・赤沼村(132)の1宿34か村である(「旧高旧領」)。かっこ内は「新編武蔵」の家数。家数総計は2,874軒、村高は柏壁宿の1,696石余が最高である。檢地は寛永5~7年、慶安5年を経て元禄總檢地に至った。

谷原開発と三郎谷開拓 谷原新田はもと谷原沼と呼ばれた沼沢地であった。寛文9年(1669)江戸の工匠中村多左衛門重政は日光廟修葺に携り、竣工後貢として若干の金子を賜った。重政はその金を無益に費消するのを恐れ、高田三郎とともに谷原開発を志し幕府の許可を得た。開拓地は3分し、1は牧草地として入会とし、2は東西に分けて東を三郎に西を重政分とした。開発は困難をきわめ満足な取扱は期待できなかったが、幕府の年貢徴収は厳しく、両人は農民の惨状を考えて年貢納入に苦慮した。西谷原の中村重政はやむ

なく和東国日根郡生垣村の生家に赴き、事情を述べて融資をうけその責を果したが、東谷原の高田三郎はその責を果たせず罰せられ、その地を去った。三郎の功に対して農民の尊敬と愛惜の情は押さえがたく、天保4年(1833)東谷原の三郎谷(福徳社の境内)、高さ1.35m・幅1mの開発記念碑「三郎谷之碑」を建立した。東谷原の小名三郎谷は、三郎の開発にちなむ地名である。西谷原新田の孤守八幡社は寛文9年の建立で、同社の別当寺心光庵は、同年当村開発其加のため建立されたと伝え、境内には東照宮を祀っている。

喜藏と見川喜藏 見川家は代々柏壁宿の名主を勤めた家柄で、喜藏の代には宝暦末年頃より本陣職も兼ねていた。喜藏は幼より父母に孝養を尽くし、長じて名主となると宿民の困窮救助に全力を傾注した。天明3年(1783)浅間山が噴火し、降灰おびただしく作物を害し、麦の収穫までには程久しかったので、喜藏は自家の米で粥を煮て飢民に施し、さらに宿内の富家に説いて雑穀を出させて救助に当たった。同6年7月の関東大水害による飢饉に際しては、百姓が徒党して一揆を起そうとしたのを喜藏は町役人と協力して説得抑圧し、自ら米穀商を戸ごとに説いて会所を設置し、米の安売りを行った。しかしまだ十分でなかったのが自家保有の米を焚き、富商よりも贈出させて、300人余の人を飢饉から救った。人々は謝して事の概況を幕府に上書した。また喜藏は柏壁が大落吉利根川と古橋田川沿いの低地に位置し、大雨ごとに水災に悩むのを憂い、宿の周囲の大落吉利根川べり(備後村境から砂塚まで)と、古橋田川の堤防(江曾堤)を高くすることを考えた。自らの資金を人夫の扶持米に投じ長さ450間ほどの堤防増築を完成した。

寛政3年(1791)の洪水は水量殊に増し、新冠堀・土井堀などから溢水が溢れ、宿全体が浸水する危険が生じた。喜藏は宿民を督励して古堤に土俵を築き日夜警戒に当たったので、柏壁耕地はもろろん下流の田地2~3万石の地も流失を免れた。村民はこれを深く謝し、193人の連署でその功を上書し、その堤を「喜藏堤」と名づけた。現在は宅地開発により喜藏堤は川久保地区に、江曾堤は南中曾根にわずかにその名残をとどめるにすぎない。また喜藏は凶悪には利息を取らず金子を貸し与えたので人々は心服し、訴訟は喜藏の言によりたちまち解決した。下野島田那賀郡乙女村に手余りの田地が多かったので、幸手宿の知久文左衛門と語り、63人の農民を移して住まわせるなど、生涯農民の救済に尽くした。幕府もその善行を賞し、終身帯刀、子孫まで苗字を許した(孝義録)。

(近現代) 行政区画の変遷 本市域に該当する江戸期の村々1宿34か村は次のような変遷をたどった。

明治初年 武蔵知県事→大宮県→浦和県、武蔵知県事→岩槻藩→岩槻県、岩槻藩→岩槻県、下総知県事→葛飾県

明治4年 埼玉縣に所属。
 明治5年 区制では第4~5区に所属。
 明治7年 内牧村に吉郎兵衛新田を合併、東谷原新田・西谷原新田が合併して谷原新田成立。
 明治12年 郡区町村編制法施行により南埼玉郡・北葛飾郡に所属。

明治17年 連合戸長役場制により柏壁宿・小清村・上埴田村・備後村・八丁目村・藤塚村に所属、

明治22年 市制町村制施行により南埼玉郡柏壁町・内牧村・豊春村・武里村、北葛飾郡幸松村・豊野村が成立。

昭和19年 柏壁町・内牧村が合併して春日部町成立。

昭和29年 春日部町・豊春村・武里村・幸松村・豊野村が合併して春日部市成立。昭和54年1月1日現在、住居表示実施地区として5町、未実施地区として5町33大字を数える。

新方領耕地整理事業 新方領の地は概して低湿地帯で湿田が多く、深さ1mに達する湛水が半年以上も続く谷原地区や、これに近い状況を呈する大場地区のように排水不良地や、用水路に遠く旱天には田畑が焦土と化す八木崎地区のような灌漑不良地が交錯し、水稻の作況は不良に悩んでいた。また農道も屈曲し、農具・収穫物の運搬にも不便であった。この地に関係する2町7か村（市域は柏壁町・豊春村・武里村、ほかに川通が・大袋・大沢・桜井・新方・荻島の各町村）は耕地整理法を受けて、明治40年から耕地整理基本調査を実施した。翌41年12月耕地整理事業発起認可申請書を農商務大臣に提出、42年1月認可、3月に創業総会が柏壁町天理教会で開かれた。この地の耕地整理は用排水の疏通に重点が置かれたため、下流の越谷市増林地区では出水時の氾濫を恐れ上流の米田大用水も用水不足を心配するなど、計画遂行の段階で多くの紛争を生じた。そのため創業総会は延期派の反対を封ずる警察官100名余の導入のもとに、断行派による一方的な議事進行となった。こうした対立の原因は前述の用排水問題はもちろん、この橋の事業に伴う工事費負担の忌避と、この地が元来政友会系の地盤だったところに、耕地整理事業の推進者が憲政本党の原又右衛門（武里村）だったこともあって政争へと発展し、対立をいっそう深刻化させた。突進に当たっては各町村ごとに耕地整理委員を選出、委員長には原又右衛門が就任した。工事監督は県に農業技師の派遣を要請、本部ならびに出張所を3か所に置き、それぞれに県の農業技師を配属した。43年の利根川の大出水には、水災により工事は大損害を来したが、大正5年3月ようやく完成、整理総面積3,090町歩、工事費19万8,132円に達し、その規模は全県一を誇るものであった。

町営電気事業 明治44年の電気事業法の公布により各地に電燈会社設立の気運が起こったが、柏壁町も有志により柏壁電燈株式会社（発起人斎藤八右衛門ほか8名）の設立許可を申請していた。同年12月初壁町会は電気事業の公益性に着目し、事業経営を同社より譲り受けることを決議し、農知事と通信大臣に陳情、翌年2月経営権の無償譲渡をうけた。9月町会は専務委員3名を選出、町役場に電気部を置き、助役を電気部長に選任して経営に当たらせた。当時県内では公営の電気事業を行っている町村がなかったため、栃木県足尾町と神奈川県秦野町の実情を視察して計画を立てた。電力は利根発電株式会社と供給契約を結び、川久保に変電所を設置、専任技師1名と電気工手2名を常動させた。大正4年1月配電設備工事が完成し、逓信省から仮使用も許可されて町内にはじめて電燈がとも

った。ここでは需要家の遠致設備の敷設などは無制限に応じかつ管理も良好だったので、会社経営の事業とは大いに異なり、役場や学校などの公共施設と保安燈はすべて無料であった。こうして順調な経営を続けてきた町営電気事業は第2次大戦中の配電統制令によって、昭和17年関東配電株式会社強制的買収され、その幕を閉じた。

桐材工業と変わら帽子 桐タンスと変わら帽子製造は春日部の代表的地場産業である。江戸期、武士の衣服入れとして使われていた長持に工夫をこらし、引き出しをつけてつくられたタンスは、春日部周辺に良質の桐材が多かったことや、大消費地江戸（東京）に近いなどという有利な条件に支えられて起こった。やがて桐材が地元で供給できなくなると会津の桐材が導入され、大落古利根川の喜藏河岸、江戸川の岩井河岸・土生津河岸から運び込まれた。春日部タンスが有名になったのは、上町に住む厚見重次郎が製品を改良して、大正10年の上野の平和博覧会で最優秀賞を受賞したのが契機だとされている。昭和2年に品質保持のために専任検査員を置き、厳重な製品検査のうえ出荷したことも大きな要因である。第2次大戦前は川越地区の3分の1以下であったが、戦後は急速に発展し、現在は戦前にはほぼ匹敵するようになった。桐材は群馬・福島・岩手の各県から移入し、地元材は全く利用していない。製品は総桐タンスが50%を占め、高級品中心で製品の大半は京橋地域へ出荷している。タンス製作の際にできる廢材を利用した桐小箱の生産は明治期にカンヤピンなどの容器生産から始まった。現在では桐木箱のほか、羽子板・人形ケース・手もとタンス、メダルや記事の容器など製品は多様である。桐材製造業者は現在20軒ほどあるが規模は小さい。

変わら帽子は明治13年に真田紐・経木を使用して帽子製造を始めたのが最初とされている。はじめ経木が岩手県から入り経木真田の帽子が生産され、これと並行して変野真田の帽子も作られた。原料の変わらは中国からの輸入に依存し、経木は広島・岡山・山口の各県および東北地方から供給されている。市内の業者は20軒ぐらゐで企業は零細であり、さらに下請け内職を抱え、農閑期における余剰労働力に依存するという浮動的面面をもっている。製品の8割は変わら製品で、90%は農業用として静岡以東の東日本に出荷され、最近では原料の高騰と労働力不足からレジャー用品、身辺装飾品、幼稚園児の帽子生産などに移っている。

東京のベッドタウン 春日部の都市化を大きく規定したのは武里団地の造成と地下鉄日比谷線の乗り入れである。武里団地は昭和38年11月に日本住宅公団によって着工され、41年1月から入居を開始した。中層の賃貸・分譲住宅を合わせて177棟・6,119戸・2万2,000人を収めるマンモス団地で、ここだけで独立した自治体規模である。このほか民間業者による住宅開発も盛んで春日部岩槻小林団地・東急不動産武里ニュータウン・藤ヶ丘文化村などが建設され、東京のベッドタウン化している。

武里団地の入居に合わせて、昭和41年9月から相互乗り入れの地下鉄日比谷線が北春日部駅まで通じ、都心への通勤が非常に便利になった。また近代工場の誘致のために37年から国道16号バイパスと吉岡田川には

さまれた地域に春日部内牧工業団地が造成され、42年から企業進出がはじまり、現在明治乳業・クレミー食品・中津製菓など10数社が操業しており、食品工業を中心として、在来工業から近代工業へと大きく変容しつつある。

明るく住みよいまちづくり 昭和47年に「ゆとりとるおいのある文教住宅都市の建設」を基調とした基本構想が策定された。まず土地の有効利用を図るために住居地域と商工業地域などの混在した無秩序な開発を防止し、農業の生産性を高め、地域の特性と自然環境に即したまちづくりを目的としている。特に駅東口周辺の再開発、そのほか6か所の駅周辺の環境整備、駅西口・国道16号沿い・熱帯周辺の新市街地の完成などの計画実施を進めている。道路は計画中の武里内牧線の開通など整備に努め、緑地確保のため13か所の都市公園を整備し、一の湖近隣公園も53年には開設する。さらに教育施設の充実と、県東部地域の要衝として商工業の促進と合理化、大都市近郊の特性を生かした都市型農業の推進などにも重点を置いている。

史跡・文化財・文化施設

国特別天然記念物に牛島のフジ（牛島）、県民俗文化財にやったり踊り（大畑）、県天然記念物には満願寺のお薬師イテウ（新方坂）がある。県重要遺跡には花積貝塚（花積）、内牧古墳群（内牧）がある。

文化施設には市立図書館（柏壁駅1丁目）がある。

かすかべ 春日部（春日部市）

柏壁・柏壁とも書く。県東部、大落古利根野田川に沿って発達した自然堤防上に位置する。地名の由来は4世紀頃、安閑天皇の時に設けられた屯倉で御名代部であったことによる（旧県史）、県指定の天然記念物院神社のイヌグサや、鎌倉期～南北朝期にこの地で活躍した春日部時賢の館跡がある。

〔中世〕春日部郷 鎌倉期から見える郷名。鎌倉期から南北朝期にかけて春日部氏の支配。「吾妻鏡」によれば、文治元年春日部実高が壇ノ浦の戦いに従い、元久2年正月の定縁の際には実平が馬1匹を献上している。さらに室治元年実高の時、室治の乱で三浦泰村に味方して敗れ、泰村などとともに自害している。その孫の重行は元弘3年新田義貞の挙兵に従い、鎌倉を攻め功を挙げ、延元元年足利尊氏が建武政権に反抗した折は南朝に従って奮戦し、延元元年8月30日の後醍醐天皇崩御により上総守・關山辺南部と下総守・河辺森内春日部郷の地頭職が与えられている（武文）が、同年名和長年等とともに足利方に敗れ討死にしている。このほか、春日部の名は、室町期の成立と思われる市場之祭文に、「下総州春日部郷市系成之」とある（武文）ほか、嘉吉3年2月30日には山村頼正左衛門宛ての上杉氏の奉行長尾景房らの奉書に春日部の地名が出てくる（武文）。戦国期には小田原北条氏の勢力下であり、元徳4年2月4日には北条氏繁より関根沼津助宛てに「掃ヶ辺」での合戦の功を賞して感状が与えられている。さらに天正17年3月24日には岩槻城主太田氏房より時賢の諸役免許の印判状が出されており、当時春日部が岩槻城の惣領所だったことがわかる（武

文）。

〔近世〕柏壁宿 江戸期～明治22年の宿名。埼玉郡新方部領のうち、古くは太田荘、のちに新方荘に属したといい、一説には騎西が領に属したという。幕府領、日光街道第4の宿駅で、常備伝馬25人・25匹、宿の成立は天正18年と推定される寛9月12日の高力家印判状で、高力清長から柏壁宿の権が出されているところから（武文・関根文書）、この頃から、はじめて柏壁町と称し、のうち柏壁宿と称した。寛永6年の検地帳が現存しており、騎西が新方荘柏壁村と見える。村高は「田圃簿」では柏壁町として1,269石余、うち田122石余・畑5816石余、「天保郷帳」では1,696石余、「天保郷帳」では柏壁宿として1,711石余、「陽高別領」では1,696石余。村の規模は東西30町・南北10町。化政期の家数800余軒。多くは街道に軒を通わ、宿駅および諸商を営む。毎月4・9の日に市を立て諸商売を行う。宿務の繁忙時は、近郷29か村より財郷を出す。用水は古開田原川、排水は土井堀・新宿堀を利用。鎮守は宿の鎮守としての八幡社、寺院は新義真言宗於時院・同成就院など。高札場は1か所。小名には上宿・中宿・新宿など。旧家は次郎兵衛家関根氏と丸左衛門家関根氏、明治4年埼玉縣に所属、同9年の戸数891・人口4,424、馬10、荷船7・水産子機船5、人力車90・荷車80。男で農業を営むもの400戸、商業を営むもの320戸、工業を営むもの80戸、女で農業を営むもの551人、商業を営むもの30人。物産は米・麦・大豆・小豆・清酒・蕎麦・醤油・味噌、上大増新田に桑地がある。同6年公立小学校として成勝院に柏壁学校（生徒数149）と真盛院に日新学校（生徒数115）を假設。同12年南埼玉郡に所属。同22年柏壁町となる。

〔近代〕柏壁町 明治22年～昭和19年の自治体名。南埼玉郡に所属。明治22年町制施行により柏壁宿が町制して成立。大字は柏壁。役場を大字柏壁に置く。明治22年の人口5,081、昭和15年の世帯数1,661・人口8,179。昭和19年内牧村と合併して春日部町となる。

〔近代〕春日部町 昭和19～29年の自治体名。南埼玉郡に所属。柏壁町と内牧村の2自治体が合併して成立。大字は柏壁・内牧・梅田。役場を大字柏壁に設置。昭和29年豊春村ほかと合併して春日部市となる。各大字は同市の大字として存続。

〔近代〕春日部市 昭和29年～現在の自治体名。県東部元荒川と庄内古川の間に位置する。昭和29年市制施行により春日部町・豊春村・武里野村・幸松村・豊野村の5自治体が合併して成立。33大字を編成。昭和41年大字増戸の一部を岩槻市へ分離し、岩槻市大字長宮の一部を編入して現市域となる。市役所は大字柏壁に設置。昭和45年の人口8万4,919。市南部に武里団地ができるなど人口の増加が著しく、東京のベッドタウンとして急激な発展を遂げつつある。○〔地誌編〕春日部市

〔近代〕柏壁 明治22年～現在の大字名。はじめ柏壁町、昭和10年春日部町、昭和29年からは春日部市の現行大字。人口は明治22年5,081・昭和45年2万1,441。昭和22年のカスリン台風では、利根川堤防の決壊で大きな被害を受けた。昭和44年一部が現行の南栄町・中央3丁目、同50年一部が現行の柏壁東1～6丁目、同51年一部が現行の緑町1～6丁目・八木崎町・浜出戸

1～2丁目となる。○〈地誌編〉春日部市

かすかべにいしゅく 榎登新宿〈春日部市〉

〔近世〕江戸初期に見える宿名。埼玉郡・葛飾郡の郡境のあたり。徳川家康の奥州征定直後の天正18年と推定される寛9月12日の高力家印判状によれば、徳川氏の家臣高力清長は、当新宿に前から住んでいる者を集め、新宿の掌櫃を圖書・彌正の2名に命じている(武文)。現在の春日部市大字柏壁のあたり。

角川日本地名大辞典より
(大村進・須賀茅郎氏)